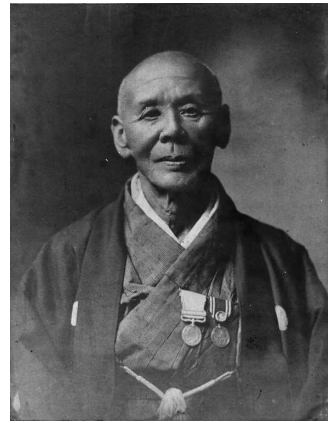


# 米作りの夜明け

中山 久蔵

現在、北海道では、十

数種類もの米が作られ、日本有数の産地となっています。しかし、今から約百五十年前の明治のころ、北海道は米作りには向かないと言われていました。このような時代を変えたのは、ある人物の米作りにかける強い思いでした。



〔旧島松駅通所蔵〕  
(資料提供：北広島市教育委員会)

一八二八年、河内国（現在の大阪府）に生まれた中山久蔵は、仙台藩士に仕えていました。しかし、明治維新という改革により、仕事を失ってしまいます。そのとき、久蔵はすでに四十歳でしたが、「今まで失敗続きで何もやりとげることができなかつた。生まれ変わったつもりで再出発しよう。」と思い、考えた末に、当時未開の地が数多くあった北海道で農業を始めようという夢をもち、海を渡りました。

久蔵は、北海道の勇払（現在の苫小牧市）で農業を始めますが、勇払の土地は農業に向かず、作物はうまく育ちませんでした。そこで、農業に適した土地を探し求め、島松（現在の恵庭市と北広島市の境界辺り）へ移り住みました。

当時の北海道の農業は、主に野菜やヒエ、ソバなどを育てていました。米作りは、寒い気候のため、道南の一部でしか行われておらず、自分たちの手で米を作ることは、北海道に移り住んだ人々の強い願いでした。久蔵も「米は、わたしらにとって命をつなぐ大切な食べ物だ。」と考えていました。

そう考えているうちに、久蔵の心に「やってもみないで最初からあきらめてどうする。まずは作ってみるべきではないか。」という思いがわき上がりました。久蔵は、一人で米作りに取り組むことを決意しました。

久蔵は、大野村（現在の北斗市）から「赤毛」と呼ばれる種もみを取り入れ、苗を育てました。芽が伸び始めるまでは、冷たい川の水温を上げるために、わかしたお湯を大きな風呂樽を使って、夜通し水田に流し続けることもあったと伝わっています。

そんな久蔵を見て、「北海道に稲作は不向きだから、水田をやめて、畑作をやってみてはどうだ。」という人もいました。しかし、久蔵は自分を信じて米作りをあきらめませんでした。

こうして、努力と工夫を重ねた久蔵は、当時誰もが無理だと言っていた米を十アール当たりにして三四五キログラム収穫しました。ここに、北海道の米作りの「夜明け」がやってきたのです。

その後、久蔵は、「一人でも多くの人が、一粒でも多くの種もみを育ててくれれば、世の中は変わっていきますのじゃ。」と言って、苦勞の末育てた種もみを無償で配り、農村を訪ね歩いては米作りの指導を行いました。

久蔵が亡くなった翌年の一九二〇年、北海道米の生産量は百万石を超えました。「北海道で百万石の米がとれるようになるまでは死なない。」と言っていた久蔵がその実現を



〔寒地稲作発祥の地記念碑 北広島市〕  
(資料提供：北広島市教育委員会)

目にすることはありませんでした。しかし、亡くなる前日まで水田を見まわり続けた久蔵の姿から、私たちは大切なことを学ぶことができます。

一八二八	河内国（現在の大阪府）で生まれる
一八五三	仙台藩に仕える（三六歳）
一八七〇	勇払で農業を始める（四十二歳）
一八七一	島松に移り住む（四十四歳）
一八七三	赤毛種の試作に成功する（四十六歳）
一八七七	第一回内国勸業博覧会に米を出品し、北海道でも米が作れることを示す（五十歳）
一九一九	島松で死去する（九十二歳）
一九二〇	北海道米の生産量が百万石を超える

\*仙台藩：江戸時代、陸奥国宮城郡仙台地方（現在の

宮城県）を領有した藩

\*石：米一石は、約一五〇キログラム